書　評

The Passion in Mark ; Studies on Mark 14-16, *edited by W. H. Kelber, Philadelphia, Fortress Press, 1976, 203pp.*

本書はシカゴ大学神学部の N. Perrin を中心に編成された7人の新約学研究チームがマルコ福音書の受難物語に取り組んだ作業の成果である。この7人は，そのほとんどが，イエスの思想や福音書記者の神学について注目すべき業績をここ数年間に次々に発表している若手の学者であって（イエスの教説における神の国について数冊の教書を著わしている N. Perrin,「たとえ話」研究の J. D. Crossan,「マルコにおける神の国」の W. H. Kelber，マルコ福音書を原始教会内の論争から生れたと見る T. J. Weeden，イエスのサンヒドリン裁判を綿密に考註した J. R. Donahue など），彼らがこれまでの著作において見せてきた個性ある視点，健実な方法論，確かな論証力は，本書においてもよく発揮されている。本書は彼らが分担して研究した7つの論文を主部分とし，これに Donahue が研究史的な「序論」を付し，Kelber が全体をまとめつつ不足分を補うというねらいの「結論」を置いている。マルコの受難物語中，本書において正面から取り上げられていないペリコーペは，ベタニヤにおける油注ぎ，ピラトの裁判とバラバの釈放，アリマタヤのヨセフによる埋葬，であるが，これらの個所も7論文の随所において，また「結論」において相当程度触れられており，したがって受難物語全体に亘る研究となっている。

さて福音書を記述した著者たちにとって，また彼らに資料を伝承，提供した原始教会にとって，イエスの受難と死が重要な意味をもっていたことは，あらためて論じるまでもない。それはマルコ福音書の構造からも指摘できることであって，すでに19世紀末に M. Kähler がこの福音書を「かなり長い序論のついた受難物語」と規定したとおりである。その後福音書批判の方法として登場した様式史分析では，主に受難以前のイエスの言葉と行動についての伝承の分類，伝承を形成した教会の状況（「生の座」）などに関心が集中し，受難物語については，かなり古くからまとまったブロックとして伝承されてきたものというような見方が支配的であった。それは，受難物語はたしかにいくつかの場面を語るペリコーペから成っているが，しかしこれらは独立しては積極的な宣教的意味をもち得ないという認識であった。この部分においてイエスは人々に見棄られ，奇蹟も行い得ず，無力に死に向っていくのであり，他方弟子たちは次々にイエスを裏切っていく。これらの場面は一貫して語られ復活の告知に至るときに初めて宣教的効果をもつのであるから，受難物語はごく初期からまとまった伝承であったというわけである。そしてイエスや弟子たちのマイナス面を語る受難物語は，全体をとおして福音書の中でも史的に最も信頼できる部分と見なされた。このような考え方に対し，受難物語にも伝承のプロセスがあったのであり，そこに当然物語の解釈的発達拡大があったという主張が，着実な資料分析に裏付けられて，

強く打ち出されるようになった。そこで受難物語のより古い文形をつきとめようとする試みや発達の諸段階を確認しようとする努力が重ねられてきたが，近年，編集史方法が導入されるに及んで福音書記者マルコが受難物語をどう書き改めたかが，新しい問題として浮び上ってきた。つまり受難伝承の形成に影響を与えた諸要因（たとえば旧約の作用—Lindars, Ruppert, 教会の礼拝儀式を重視するもの—Schile, 教会の伝記的関心—Linnemann, ヘレニスト教団からの影響ないしそれとの対決—Schreiber, Schenk. など）は，マルコ以前の教会において作用したのみでなく，マルコもこれに加っているのであって，したがって記者マルコの神学と史的状況が解明されねばならなくなってきた。このような学界の歩みを踏まえて，本書は受難物語の7つのペリコーペに光を当てようとする。

編集史方法は，一般に伝承部分とそれに対する福音書記者による改訂加筆部分を分離し，後者において見出される編集者の神学思想を取り出そうとするものであるが，この方法に留るなら，実はかなり一方的な結論しか得られない。というのは，記者の神学が伝承部分における神学と共通する場合，これを正確に視野に入れることが少なく，他方記者が必ずしも彼の神学と一致しない伝承を記している場合，なぜそのような伝承を受入れたのかという問題が十分に意識されないで見逃されることがあるからである。そこで本書では，伝承と編集を区別して考察する場合の「編纂史」（editorial criticism）と，作品の最終形態に見られる資料操作全体から判断されるべき「構成史」（composition criticism）の必要を考える。これによって，直接に釈義の対象となっている個所に研究を限定するのでなく，福音書全体の思想の流れから受難物語を見直すことになる。本書が受難物語の研究書でありながら福音書全体における受難物語の位置づけを考え，受難物語理解の鍵を1—13章にも見出そうとしているのはこのためであり，それが本書の特色となっている。

個々の論文について細かく紹介することはできないので，以下二三の点を簡単に述べるに留めておきたい。第一にマルコ福音書の成立について，70年のエルサレムの戦乱が大きく関係しているとされる。そこでたとえば，サンヒドリンでの裁判の場面において，イエスはエルサレムにある人の手による神殿を破壊すると言ったという証言が提出され（14. 58, 15. 29では十字架につけられたイエスがこの言葉でののしられる），彼の死の瞬間には神殿の幕が破れる（神殿崩壊を象徴する）事件が起るのであるが，記者マルコの意図では，これらの物語を通して，イエスの死において神殿はその意義を失ってしまったという神学的主張を述べると同時に，70年の戦乱と神殿壊滅のショックを経験したキリスト教徒に対して励ましを与えているのであるという。70年以後に教会が受ける迫害も，イエスの言葉（13.9—13）と彼自身の受難においてすでに予示されていたことであるというのがマルコの主張である。つぎに70年以後のマルコの教会の状況は，イエスの人の子としての出現を期待しながらもなおそれが実現せず，動揺と不安の中にあったと考えられる（13. 6, 21）。これはイエス不在の状況である。マルコは他の福音書のように復活したイエスの顕現を語らない。むしろ顕現伝承には否定的であり，物語は空虚な墓を述べ，弟子たちが逃亡したままのところ（16.8）で終る。しかしマルコにおいてイエスが不在であるという認識は，十字架上でのイエスにとって神が不在であった状況に新しい意味を与える。教会は

イエスの経験した闇を共に歩みながら，イエスのとげた他者のための死（10. 45, 14.24）を受取るのである。第三に，受難物語において多くのキリスト論称号が用いられ，それがイエスの死の理由とされている（神の子，キリスト，人の子，ユダヤ人の王）。これらの称号はこの福音書の前半にも用いられているのであるが，称号をめぐって1—13章と14—16章を比較すると，受難物語では前の部分の用法を引き継ぎつつ新しい救済論的意義を担っていることが見出される。そこで受難物語での苦難のキリスト論は，前半のたとえば「奇蹟行者」キリスト論への反論でもなくそれとの単なる組み合わせでもなく，相互結合として，一つの深い逆説の姿として理解されるべきであるという。

このほか本書について論じるべき点は多いが，一貫して編集史方法が適用されている。このことは，イエスが自らの死をどう予測し理解していたかという問題をますます困難なものにしているが，この困難さを見きわめるところに今日の新約学の一つの道があるといえよう。（橋本滋男）

Gustavo Gutiérrez, A Theology of Liberation. History, Politics and Salvation. *Maryknoll, N. Y., Orbis, 1973, 323pp.* (Originally published as Teología de la liberación, Perspectivas, CEP, Lima, 1971)

南米チリのアジェンデ政権が軍事クーデターによって崩壊して既に3年が経過する。失敗に終ったとはいえ，チリにおけるこの新しい社会主義の実験は第三世界と総称される発展途上国とその民衆に彼らの歴史選択のための新しい経験を与え，一つの指針を示すものであった。

ラテン・アメリカのいわゆる「解放の神学」は1960年代後半から70年代にかけてのラテン・アメリカの政治的社会的状況と密接に関連しつつ登場して来た。「解放の神学」あるいは「解放のための神学」は最初に一定の神学理論があり，それに従って人間が行動を起すという種類のものではない。すべての神学がそうであるように「解放の神学」もまた，既に起り，かつ起りつつある出来事を後づける形で生じている。そもそも状況に対する人間の応答は全体的かつ総合的な行為であって，ある種の神学教育または政治理論の結果ではない。その意味で解放の神学とは，キリスト者が応答を迫られている事実とその経験に関する反省，人間の歴史的実践を神の言葉の光のもとで批判的に反省することにほかならない。しかしこのような神学は同時にヨーロッパ，アメリカにおいてプロテスタント，カトリック双方において展開されて来た聖書学的，神学的革新の上に打立てられたものであることもいうまでもない。

「解放の神学」という主題のもとに論議さるべき神学者としては L. Alves（ブラジル）G. Gutiérrez（ペルー），J. L. Segundo（ウルグアイ）さらに1966年にゲリラの一員として戦闘中に死亡したコロンビアの司祭 C. Torres 等があげられよう。彼らはすべて